
〈論文〉

スコットランド王国の宗教改革前夜(1)

—— スコットランドの近代への途 ——

Era before the Reformation in the mid-16th century of Scotland (1)

—— On the Way to Modern Society ——

久保田 義 弘

要旨と目次

15世紀末から16世紀前半のイングランド王国やフランス王国の対立する国際情勢の中で、スコットランド王国のアイデンティティを模索した国王ジェームズ4は、イングランド王国の支配や征服を回避したが、徐々にイングランド王国との一体化政策に飲み込まれていった。本稿では、宗教改革前夜のスコットランド王国の歴史的出来事からそのことを検証する。イングランド王国によるスコットランド王国の征服・併合策謀は、エドワード1世（在位1272年-1307年）やエドワード3世（在位1327年-1377年）時代からすでに現れていたが、しかし、スコットランド王国のイングランド王国からの第1次独立戦争（1306年から1328年まで）や第2次独立戦争（1329年から1377年ごろまで）でのスコットランドの勝利によって回避された。その両イングランド国王は、スコットランド王国に臣従を迫り、スコットランドを直接的に支配しようとした。チューダ朝においては、ヘンリー7世の治世下での経済力伸展に基づいて、ヘンリー8世のフランス侵攻戦略と呼応させ、イングランド王国による一体化攻勢がスコットランドに向けられた。1603年のジェームズ6世（在位1567年-1625年）による同君連合や1707年のイングランドとスコットランドの議会連合によるイングランド王国とスコットランド王国の併合・一体化に到る萌芽がすでにヘンリー8世の永久平和条約とジェームズ4世とマーガレット・チューダの結婚（1503年）に始まっていたことを提示する。

国際情勢下におけるスコットランド王国とウォーベック問題に対するジェームズ4世の外交政策とその後のジェームズ4世のイングランドとの対応とフロドゥンの戦いについて概観する。最後に、ジェームズ5世の政治体制の特徴を概説する。

（キーワード：永久平和条約、ジェームズ4世とマーガレット・チューダの結婚、古い同盟、ジェームズ4世の外交政策、ウォーベック問題、フロドゥンの戦い）

はじめに

本稿では、15世紀から16世紀における宗教改革を通じた近代化に焦点を当て、スコットランド王国のジェームズ4世の外交政策と宗教政策を通じて、イングランド王国のヘンリー8世による一体化政策とそれに対するスコットランド王国の対応を検証する。

第1節 ジェームズ4世の外交政策と彼の死

1.1 国際情勢とスコットランド

ヘンリー5世急死後、直ぐに生後9か月のヘンリー6世が即位した。摂政会議が構成されたが、フランスとの百年戦争の進め方を巡って、和平派と好戦派が対立し、ヘンリー6世の摂政会議は二分された。国王ヘンリー6世、ヘンリー・ボーフォート(Henry Beaufort, Bishop of Winchester) (1367年生-1447年没)やサフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポール(William de la Pole, 4th Earl of Suffolk) (1396年生-1450年没)や2代サマーセット公エドモンド・ボーフォート(Edmund Beaufort, 2nd Duke of Somerset) (1406年生-1455年没)は和平派を構成し、それに対しグロスター公ハンフレイ(Humphrey, Duke of Gloucester) (1390年生-1447年没)と3代ヨーク公リチャード・プランタジエツト(Richard Plantagenet, 3rd Duke of York) (1411年生-1460年没)は好戦派を構成した。摂政会議内では和平派が好戦派を押さえて、3代ヨーク公をアイルランドに追いやり、フランスとの和平交渉を進めた。1445年にヘンリー6世とマーガレット・オブ・アンジュ(Margarete of Anjou) (1430年生-1482年没)との結婚を成立させ、和平を進めた。このとき、イングランドの和平派は、マーガレットに持参金を求めず、さらにイングランドのフランス領であったメヌ(Maine)とアンジュ(Anjou)をフランスに戻した。この返還は、イングランド国民の反感を招き、サフォーク伯はフランスに逃亡するところを捕らえられ、殺害された。1453年にボルドーをイングランドが失い、イングランドのフランス領はカレーのみとなり、ヘンリー5世(Henry V) (在位1413年-1422年)が獲得した殆どのフランス領をヘンリー6世と王妃マーガレットの治世の前半で失った。この知らせを聞いたヘンリー6世は、精神病に陥り、国政を司れなくなった。3代ヨーク公がアイルランドから戻され、1454年に王国の護民官として摂政に任命された。このころマーガレット王妃が懐妊し、マーガレット王妃を養護する2代サマーセット公と3代ヨーク公の対立が激しくなった。この対立がバラ戦争の根幹にあった。

1455年5月22日に3代ヨーク公リチャードは、ロンドン郊外の北東のセント・オールバン(Saint Albans)でヘンリー6世の王軍と戦い、王軍の2代サマーセット伯エドモンド・ボーフォート、2代ノーザンバーランド伯ヘンリー・パーシー(Henry Percy, 2nd Earl of Northumberland) (1394年生-1455年没)、8代クリホード伯トマス・クリホード(Thomas

Clifford, 8th Baron de Clifford) (1455年没)を戦死させ、大勝した。これがバラ戦争の始まりで、第1次セント・オルバーンの戦い (the First Battle of St Albans) として知られている。バラ戦争は、1455年からテューダ朝の開かれる1485年までの30年間、ヨーク家とランカスター家との戦いで、ランカスター家ではヘンリー6世と王妃マーガレットが首領となり、ヨーク家では3代ヨーク公とその子エドワード (Edward Plantagenet, 4th Duke of York) (後にエドワード4世)、エドモンド・プランタジニット (Edmund Plantagenet)、クラランス公ジョージ・プランタジニット (George Plantagenet, 1st Duke of Clarence) (1449年生-1478年没)、およびグロスター公リチャード・プランタジニット (Richard of Plantagenet, Duke of Gloucester) (後のリチャード3世 (Richard III) (在位1483年-1485年)) が中心となり、両家の間での王位継承・王権を巡る争いであった。

イングランド王国内のバラ戦争 (Wars of the Roses)¹ (1455年から1485年) が終結して

¹ 第1次セント・オルバーンの戦いではヨーク家がランカスター家に大勝したが、その後も、ヘンリー6世の王妃マーガレット・オブ・アンジュの反撃と、両家の王位継承を巡る戦いは続いた。1460年にノーザンプトンの戦い (the Battle of Northampton) でヘンリー6世は捕らえられ、ロンドンに連行された。3代ヨーク公は、ヘンリー6世の後継は3代ヨーク公とその後継者であるという協定を議会に提出した。マーガレット王妃とその一人息子エドワード (Edward of Westminster, Prince of Wales) (1453年生-1471年没) は、ウェールズ、スコットランドに逃亡した。マーガレットは、息子のエドワード・オブ・ウェストミンスターを正当な後継者として、イングランド北部で兵を募った。1460年に王妃マーガレット軍の司令官3代サマーセット公ヘンリー・ボーフォート (Henry Beaufort, 3rd Duke of Somerset) (1436年生-1464年没) は、ヨークシャーで兵を挙げ、3代ヨーク公リチャードと激しく戦い、その年の12月30日にウェイクフィールドの戦い (the Battle of Wakefield) で3代ヨーク公を戦死させ、その息子エドモンド (Edmund Plantagenet, Earl of Rutland) (1443年生-1460年没) と5代ソーズベリー伯リチャード・ネヴィル (Richard Neville, 5th Earl of Salisbury) (1400年生-1460年没) を捕らえ、首切りの刑に処した。紙の王冠を被せた3代ヨーク公の首は、エドモンドとネヴィルの首と並べて、ヨークの入り口に晒された。王妃マーガレットは、1461年2月17日に第2次セント・オルバーンの戦い (the Second Battle of St Albans) でも勝利し、国王ヘンリー6世を取り戻した。マーガレットは、ヘンリー6世を戦いの間監視していた2人のヨークの捕虜を首切りの刑に処した。

1461年3月29日にトートンの戦い (the Battle of Towton) でランカーシャー軍 (マーガレット軍) は、3代ヨーク公リチャードの長男エドワード (エドワード・プランタジニット, 4代ヨーク公) に大敗し、この4代ヨーク公がエドワード4世 (Edward IV) (在位1461年-1470年, 1471年-1483年) として王位に就いた。マーガレットとその息子エドワードや3代サマーセント公は、再びウェールズ、スコットランドに逃亡した。イングランド北部で戦うが、マーガレットとその息子は、フランス王ルイ11世 (Louis XI) (在位1461年-1483年) を頼ってフランスに逃げた。そこでルイ11世と16代ウォーリック伯リチャード・ネヴィル (Richard Neville, 16th Earl of Warwick) (1428年生-1471年没) の協力を得て、イングランドに戻り、1469年にはエッジコートムーアの戦い (the Battle of Edgecote Moor) でヨーク軍との戦いに勝利し、エドワード4世から王位を奪った。エドワード4世は、フランスのブルゴーニュに逃れた。しかし、1471年のバーネットの戦い (the Battle of Barnet) でエドワード4世は16代ウォーリック伯を敗北させ、続いてツークスベリーの戦い (the Battle of Tewkesbury) ではランカスターの残党を破り、彼はエドワード4世として再度王位に就いた。この戦いで王妃マーガレットの一人息子エドワード (Edward of Westminster, Prince of Wales) が戦死した。その後直ぐにヘンリー6世がロンドンで死亡し、王妃

数年後に、ジェイムズ 4 世 (James IV) (在位 1488 年-1513 年) (1473 年生-1513 年没) が王位に就いた。リチャード 3 世 (在位 1483 年-1485 年) (1452 年生-1485 年没) は、ヘンリー・テューダ(ヘンリー 7 世) (1457 年生-1509 年没) とのボスワースの戦い(The Battle of Bosworth Field) (1485 年 8 月 22 日) で大敗し、王位を篡奪された²。このことは、単にバラ戦争の終結

マーガレットは、フランス王ルイ 11 世に引き取られ、フランスのアンジューで 52 歳の生涯を閉じた。

² ヘンリー 7 世はテューダ朝の開祖であった。2 代リッチモンド伯ヘンリー・テューダ (Henry Tudor, 2nd Earl of Richmond), すなわち後のヘンリー 7 世 (1457 年生-1509 年没) の父親は、初代リッチモンド伯エドモンド・テューダ (Edmund Tudor, 1st Earl of Richmond) (1430 年生-1456 年没) であった。彼の祖父は、オウェン・テューダ (Owen Tudor) (1400 年生-1461 年没) であった。オウェン・テューダは、秘密裏にヘンリー 5 世の死後、その王妃キャサリン・オブ・ヴァロア (Catherine of Valois) (1401 年生-1437 年没) と結婚した。彼女は、ヘンリー 5 世 (Henry V) (在位 1413 年-1422 年) が 1422 年に病没死した後、議会で反対されながらも、王太后付納戸係秘書官であり一介の騎士程度の身分にすぎないウェールズ出身のオウェン・テューダと再婚し、1430 年にこの 2 人の間にエドモンドが生まれた。ヘンリー 6 世 (Henry VI) (在位 1422 年-1461 年, 1470 年-1471 年) は、異父弟エドモンド・テューダをリッチモンド伯に叙爵し、彼を全ての伯爵なかで最右翼に位置づけるという破格の待遇をした。この叙爵によって彼は、1455 年に名門初代サマーセット公ジョン・ボーフォード (John Beaufort, 1st Duke of Somerset) (1403 年生-1444 年没) の娘マーガレット・ボーフォード (Margaret Beaufort) (1443 年生-1509 年没) を妻に迎えることができた。このマーガレットは、ランカスター公ジョン・オブ・ゴント(エドワード 3 世の 5 男) (John Gaunt, 1st Duke of Lancaster) (1340 年生-1399 年没) の曾孫であった。エドモンド (初代リッチモンド伯) とマーガレット・ボーフォードの間に生まれたヘンリー (2 代リッチモンド伯) がヘンリー 7 世になった。

ヘンリー 7 世は、彼の母マーガレットによってランカスター家の血筋に繋がり、また、エドワード 3 世の 5 男ジョン・オブ・ゴントに繋がる血筋であったので、本来であれば王位継承権を持つはずであったが、しかし、王位継承権から排除されていた。というのは、初代サマーセット公ジョン・ボーフォードがエドワード 3 世の 5 男ジョン・ゴントとその 3 番目の妃キャサリン・スウィンフォード (Catherine Swynford) (1350 年生?-1403 年没) との間に生まれていたが、2 人の正式結婚前に生まれていた庶子であったためである。その後、2 人は正式に結婚し、彼は嫡出子と認められたが、ヘンリー 4 世 (Henry IV) (在位 1399 年-1413 年) は彼の王位継承権を排除した。

1460 年のロンドンの議会は、3 代ヨーク公の圧力の下、ヘンリー 6 世の後継者に 3 代ヨーク公リチャードとその末裔にすることを決めた。これは、王妃マーガレットの息子エドワードが王位を継承しないこと、さらに初代サマーセント公ジョン・ボーフォードが王位継承権から排除されていたので、ボーフォード家の血統であった 3 代サマーセット公ヘンリー・ボーフォード (Henry Beaufort) (1436 年生-1464 年没) や初代リッチモンド伯妃マーガレット・ボーフォード (Margaret Beaufort) とその息子ヘンリー・テューダ (後のヘンリー 7 世) にも王位相続権がないことを決めた。

この決定に対し王妃マーガレット (Margaret of Anjou) (1430 年-1482 年没) がヨークシャーで兵を挙げ、3 代ヨーク公リチャードと激しく戦い、1460 年のウェイクフィールド (Wakefield) の戦いで 3 代ヨーク公を戦死させ、紙の王冠を被せたヨーク公の首をヨークの入り口の壁に晒した。1461 年に王妃マーガレットは、第 2 次セント・オルバーンの戦いでもヨーク軍に勝利し、王位をヘンリー 6 世に取り戻したが、彼女の息子エドワード・オブ・ウエストミンスターには王位継承権は無いままであった。

ヘンリー 4 世の決定によって、初代リッチモンド伯の母マーガレットには王位継承権はなかった。したがって、その子であった 2 代リッチモンド伯ヘンリー・テューダ (後のヘンリー 7 世) にも王位継承権はなかったため、リチャード 2 世 (Richard II) (在位 1377-1399 年) から王位を剝奪したヘンリー 4 世と同様に、ヘンリー 7 世も王位篡奪者であったと見ることもができる。2 代リッチモンド伯ヘンリー・テューダは、1485 年 8 月にボスワースの戦いでリチャード 3 世 (Richard III) (在位 1483 年-1485 年) を打ち破

を意味するだけではなく、ヘンリー2世(Henry II) (在位1154年-1189年) からリチャード2世(Richard II) (在位1377年-1399年) (1367年生-1400年没)、ヘンリー4世(Henry-IV) (在位1399年-1413年)からヘンリー6世(Henry VI) (在位1422年-1461年, 1470年-1471年)³, そしてエドワード4世(Edward IV) (在位1461年-1470年, 1471年-1483年) からリチャード3世(Richard III)⁴ (在位1483年-1485年) へと引き継がれたプランタジエット王家の血筋が絶えたことを示していた。また、バラ戦争の終結はイングランド中世の終焉をも示唆し、バラ戦争では多くの伝統的な貴族の家系が途絶えた⁵。ヘンリー・テューダが王位継承者として残った。このために、次の王朝では新しい階層から宮廷人を登用することが可能になった。

新しい王朝は、ヘンリー7世によって開かれ、ランカスター家とヨーク家の融合を目指した王朝であったと理解される。それは、ヘンリー7世がエドワード4世の娘であるヨークのエリザベスと結婚したことに示されていた。また、テューダ家のバラは、ランカスター家の赤いバラとヨーク家の白いバラの組み合わせた構図をしていた。武力で王権をもぎとったヘンリー7世であるが、彼は戦争には費用がかかるのでそれを避けていた。彼は、平和主義者でもなく、永久平和論を唱えていた、あるいは、恒久平和を思い描いていたわけでもない。単にヘンリー7世は儉約家でけちな人物であったに過ぎなかった。彼の戦争回避政策は、取引に携わる都市や農村の商人層、地方のジェントリー、都市の手工業者に支持されたと考え

り、実力で王位を奪取した。ヘンリー7世としてテューダ朝を開いた。

³ ヘンリー4世によって開かれた王朝はランカスター朝と呼ばれる。この王朝はヘンリー6世で断絶した。ヘンリー6世とマーガレット・オブ・アンジューの間には、後継者エドワード・オブ・ウエストミンスター(ウェールズ王子)がいたが、彼は1471年のツクスベリーの戦い(the Battle of Tewkesbury)で戦死したと思われる。これによって王位を継承する正当な人物(嫡子)がいなくなった。

⁴ エドワード4世が開いた王朝はヨーク朝(1461年から1485年まで)と呼ばれる。この王朝は、エドワード4世の弟グロスター公リチャード3世に後継されたが、ここで断絶した。エドワード4世には、エリザベス・ウッドヴィルとの間にエドワード(Edward V)とヨーク公リチャード(Richard of Shrewsbury, 1st Duke of York)の王位継承者として2人の息子がいたが、エドワード4世は、非嫡子であると判断され、グロスター公が王位を継承し、リチャード3世として即位し、その2人は王位継承権のない親の子として、王位継承者から排除され、ロンドン塔に連れて行かれたが、それ以降の2人の消息は不明であるが、2人は死亡したと考えられる。リチャード3世がボスワースの戦いで死亡したため、ヨーク家の王位継承者もいなくなった。

⁵ 例えば、バラ戦争によってサマーセット伯爵の家系は途絶えた。サマーセット伯ジョン・ボーフォート(John Beaufort, 1st Earl of Somerset) (1373年生-1410年没)の息子である2代サマーセット公エドモンド・ボーフォートは、第1次セントオルバーンの戦いで戦死し、2代の息子の3代サマーセット公ヘンリー・ボーフォート(Henry Beaufort, 3rd Duke of Somerset) (1436年生-1464年没)は、ヘクザムの戦い(the Battle of Hexham)で戦死し、2代の息子の4代サマーセット公エドモンド・ボーフォート(Edmund Beaufort, 4th Duke of Somerset) (1438年生-1471年没)とジョン・ボーフォート(John Beaufort) (1455年生-1471年没)は、ツクスベリーの戦い(the Battle of Tewkesbury)で戦死した。これによってボーフォート家は途絶えた。

られる。

彼の専制政治の目的は、第1に、バラ戦争時代の貴族の土地所有を縮小すること、第2に、王室の独立した財産(富)を蓄積し予算執行に関して議会の干渉を回避すること、第3に、当時においては近代化された武器であった大砲を王室の独占とすることであった。そして、既存貴族を弱体化させ、新しい貴族層を育成することであった。彼は、第1の目的に沿って、財政の収入を増加させる幾つかの方策を採用した。例えば、決して戦うことのない戦争の費用を税で賄うことを議会で決め、法を侵犯した貴族に重い罰金を課し、古い法律を復活させ商人階層に借金を進めて重い負担をさせ、また、彼自身の節約によって、彼は財政(王室)の収入を増やし、財政黒字を達成した。彼は、貿易の重要性を十分に認識していたので、船舶の建造だけには資金を投じ、その建造を奨励した。この建造にはトン当たり5シリングの奨励金を提供した。テューダ朝の120年に及ぶ財政的安定の基礎を築いたのはヘンリー7世であった。財政収入を確保する責任は、大法官で大司教でもあったジョン・モートン(John Morton, Archbishop of Canterbury, Lord Chancellor)⁶(1420年生?-1475年没)に課され、彼は上で述べた多様な方法で財政資金を集めた。

テューダ朝の外交政策の原則は、当時の国際社会の中で権勢のあったスペイン王国とフランス王国の勢力均衡を保つことであった。どちらか一方の国が優勢になると他の国に加勢する。両国の勢力の均衡を保つように両国を支援し、どちらか一方が抜きん出ることを妨げようとした。1518年のロンドン条約では、ヨーロッパの主要国(フランス、イングランド、神聖ローマ帝国、教皇領、スペイン、ネーザランド、ブルゴーニュ)が相互不可侵と相互支援を結んだ。この条約を計画したのが、ヘンリー8世の宰相であり大法官であり枢機卿であったトマス・ウルジー(Thomas Wolsey)⁷(1471年生-1530年没)であった。この条約は直ぐ

⁶彼は、ドーゼットに生まれ、オックスフォードのベイリヤル・コレッジで教育された。彼は、エドワード4世によって、1479年にイーリ司教に任命された。リチャード3世の治世においてはその敵となり、ブレックノック城(Brecknock Castle)に監禁された。1485年にヘンリー7世が王位に就くと、彼はカンタベリー大司教にされ、1487年には大法官に任命された。モートンの税政策は、モートン・フォーク(Morton's Fork)として知られている。彼の政策を実行したのが、エドモンド・ダッドレー(Edmund Dudley)(1462年生-1510年没)とリチャード・エンブソン(Richard Empson)(1510年没)であった。

⁷彼の生い立ちに関して、身分の賤しい(屠殺業者とか牛の取引業者などと)出であると言われていたが、彼の父親ロバート・ウルジーは、ボスワースの戦いで戦死した。彼の父親は、尊敬され裕福な織物商人であったと思われる。トマス・ウルジーは、サーフォークのイプスウィッチ(Ipswich)で生まれ、イプスウィッチの学校を終えて、オックスフォードのマグダリン・カレッジ(Magdalen College)で神学を学んだ。修士を受けて、神学の助祭になった。1502年にカンタベリー大司教の祭壇奉仕者(Chaplain)になり、1507年にヘンリー7世の役職者になった。彼は、ヘンリー7世の祭壇奉仕者になり、そして彼は、リチャード・フォックス(Richard Foxe)(1448年生?-1528年没)の秘書になったが、単調な職務に対するウルジーの勤勉さと意欲がフォックスによって評価された。彼が昇進できた要因には、彼の知性、勤勉さ、昇進欲、そしてヘンリー8世との関係が影響していたと思われる。1509年にヘンリー8世は、ウルジーをAlmoner

に破られ、ヨーロッパは政争状態に突入し、1815年のウィーン会議 (Congress of Vienna) までヨーロッパの主要国が集まった会議が開かれることはなかった。

ヘンリー7世とヘンリー8世は、フランス王国よりもスペイン王国を支援する外交政策を展開した。特に、ヘンリー8世は、フランス北部の領土を獲得する戦略を展開し、1525年にパピアの戦い (The Battle of Pavia) でフランソワ1世が神聖ローマ帝国の捕虜になると、フランス王室を奪うためのフランス遠征費 (80万ポンド) を議会に要求した。しかし、議会はその要求を拒否した。神聖ローマ帝国はイングランドとの同盟を断念した。ヨーロッパではハプスブルグ家を中心にヨーロッパが統合されつつあったが、フランス王国はそれを嫌ってイタリアに勢力を拡大する政策を展開した。イタリア戦争の後、ヨーロッパを支配していたのがハプスブルグ家と手を結んだスペイン王国であった。イングランド王国は、ヨーロッパにその領土を得ることはなく、蚊帳の外に置かれたのであった。

イングランド王国は、中世末期から近代に進みつつあり、やがてスペイン王国が抜き出るヨーロッパの覇権争いの渦中にあった。その同時代人がスコットランド王国のジェイムズ4世でありジェイムズ5世 (James V) (在位1513年-1542年) であった。スコットランド王国は、イングランド王国と協力あるいは敵対する一方で、フランス王国との古い同盟を再確認し、国際社会での政治的安定を図りながら近代に向けて、不安定な行進をおこなった。知的で優れた統治者であったジェイムズ4世は、外交問題 (ウォーベック問題) やマーガレット・テューダ (Margaret Tudor) (1489年生-1541年没) との結婚を通じて、スコットランド王国の国際的地位を向上させようと積極的に行動した。

1.2 ジェイムズ4世の外交政策：ウォーベック問題

ウォーベック (Warbeck) による初代ヨーク公リチャード・オブ・シュールズベリー (Richard of Shrewsbury) 僭称問題が起こったときには、スコットランド王国はフランス王国と古い同

の職に任命した。ウルジーは、枢密院に席を持ち、若いヘンリー8世に代わって政務を仕切った。ウルジーは、1514年にリンカーン司教となり、ヨーク大司教になった。1515年に教皇レオ10世は彼を枢機脚にした。彼は、ローマ教皇の使節 (Papal Legate) であった。この立場がヘンリー8世とアラゴン・オブ・キャサリンとの離婚の調停に苦悩させた。

ウルジーが、若きヘンリーにかわって、内政および外交政策を仕切った。ヘンリーの旺盛な支出のために、ヘンリー7世が蓄えた資産も底をつき、ヘンリー8世の政府は、財政収入不足に直面した。ヘンリー8世は、フランス遠征を求めたが、財源が不足していた。ウルジーは、Amicable Grant (徳税といわれる強制貸付) で財源を調達しようとしたが、東イングランドのノーフォーク公やサーフォーク公の反対のために、その調達に失敗した。新たな収入源が必要になり、ウルジーに代わる宰相がヘンリー8世によって求められた。このとき、ローマ教皇とのヘンリーの離婚問題に関する調整に失敗したウルジーに代わってトマス・クロムウェル (Thomas Cromwell) (1485年生-1540年没) が宰相になった。1530年にトマス・ウルジーは獄中で病死した。

盟⁸ 関係にあり、イングランド王国とはノーザンバーランドを巡って対立していた。1493年にイングランド王エドワード4世の次男ヨーク公リチャード⁹を自称したパーキン・ウォーベック(Perkin Warbeck)¹⁰(1474年生?-1499年没)が現れた。彼をエドワード4世の妹のブル

⁸ 1165年(あるいは1168年)にスコットランド王ウィリアム1世(William I)(在位1165年-1214年)は「古い同盟」(仏蘇同盟)をフランスの若年王ルイ7世(在位1137年-1180年)との間で誓った。これはスコットランドが親仏色を強めていく同盟であった。ジョン・ベイリヤル王(在位1292年-1296年)は、司教4人、伯爵4人、男爵4人の12からなる議会(12名の諮問委員会)を開き、フランスの端麗王フィリップ4世(在位1285年-1314年)との間で正式の同盟(「古い同盟」と言われるが、フランスとの間での初めての同盟であった)に調印した(1295年10月)。フランスとの同盟関係を強化する戦略を採用した。

イングランド王エドワード4世(Edward IV)は、フランスとスコットランドの「古い同盟」の廃棄、ベリクのイングランド領への正式編入、スコットランド南部のアナンデイルとリズデイル(Liddesdale)の一部割譲、そしてジェイムズ3世(James III)(在位1460年-1488年)の王弟の初代オルバーニ公アレグザンダー(Alexander Stewart, 1st Duke of Albany)(1454年生-1485年没)とエドワード4世の3女シシリー(Princess Cecily of York)(1469年生-1507年没)との結婚を条件として、オルバーニ公と亡命中の9代ダグラス伯ジェイムズ(James Douglas, 9th Earl of Douglas)(1426年生-1488年没)に会った。オルバーニ公達は、エドワードの宗主権を認め、ジェイムズ3世の王位を廃位させるための援軍を彼に求めた。エドワード4世は、オルバーニ公のスコットランド帰国時に、エドワードの弟グロスター公リチャード(Duke of Gloucester)(後のリチャード3世)(1452年生-1485年没)を指揮官とする援軍の出動を命じた。1480年と1482年の間、オルバーニ公アレグザンダーと9代ダグラス伯の共同軍によるベリク包囲戦がおこった。その共同軍に対するジェイムズ3世軍の対応は鈍く、またロバート・コホランら側近の服装あるいは出で立ちが戦闘に臨むものではなかったことから、不平貴族や軍を指揮する貴族の反感を増幅させ、彼らの怒りは爆発した。不平貴族であった初代バウチン伯ジェイムズ・ステュワート(James Stewart, 1st Earl of Buchan)(1442年生-1499年没)、2代ハントリー伯ジョージ・ゴードン(George Gordon, 2nd Earl of Huntly)(1455年生?-1501年没)、5代アンガス伯アーチボルド・ダグラス(Archibald Douglas, 5th Earl of Angus)(1449年生?-1513年没)等は、ローダ教会(Lauder Church)に結集し、コホランらの側近の抹殺を謀った。

2代オルバーニ公(John Stewart, 2nd Duke of Albany)(1481あるいは1484年生-1536年没)は、スコットランドの摂政として、フランス王フランソワ1世(François I)(在位1515年-1547年)との間で、1517年に「古い同盟」を再確認するルーアン条約(Treaty of Rouen)を結んだ。

⁹ エドワード4世(Edward IV)が急死した後、彼と王妃エリザベス・ウッドヴィル(Elizabeth Woodville)(1437年生-1492年没)との間に生まれた長男エドワードと次男ヨーク公リチャードが王位継承者として残ったが、2人はグロスター公リチャードによりロンドン塔に招かれた。このグロスター公がイングランド王リチャード3世として戴冠した1483年6月26日から3か月後には、エドワード5世(Edward V)(在位1483年4月10日-6月26日)とヨーク公リチャード(Richard of Shrewsbury, Duke of York)(1473年生-1483年没)の姿は見られなくなった。このように、ヨーク公リチャードの行方が不明であったので、その後パーキン・ウォーベックのような人物が現れても不思議ではなかった。

¹⁰ 彼の生涯のことはよく分からないが、彼はフランドル出身であった。彼は、エドワード4世の妻の子であったのかも知れない。これも推測に過ぎない。10歳の時にオランダ語を学ぶためにアントワープに行き、1491年にアイルランドに行き、その支持を求めたが得られず、彼は本国に戻り、そこで英語を話すことを学んだ。彼の最初の支持者は、フランスのシャルル8世(Charles VIII)(在位1470年-1498年)であった。1492年のEtaple協定(1492年)でそれは破棄された。ブルゴーニュ公夫人は、ウォーベックにヨーク宮廷の作法を個人教授したと言われている。これに対しヘンリー7世(在位1485年-1509年)は、ウォーベックを匿っていることでブルゴーニュ公に苦情の申し入れした。これに対しブルゴーニュ公は、イングラ

ゴーニュー公夫人マーガレット (Margaret of York, 結婚後, Margaret of Burgundy)¹¹ (1446年生-1503年没)がヨーク公であると認めた。神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世 (Maximilian I)¹² (在位1493年-1519年) (1459年生-1519年没)も彼をリチャード4世であると認めた。この神聖ローマ皇帝とブルゴニー公夫人の2人は、ウォーベックにヘンリー7世打倒の軍資金を与えた¹³。1495年7月3日に、ウォーベックは、ヘンリー7世打倒の軍を起し、イングランド南部のケント州デールに上陸し、ロンドン郊外でヘンリー軍と戦うが、しかし、大敗した。彼の軍隊は150人ほどの規模であり、上陸すると直ぐに殺戮された。その後、アイルランドに行き、彼はデズモンド伯 (Earl of Desmond) (1520年没?)から支持を受けた

ンドとの取引を断つ対応にでた。これによってウォーベック問題は国際的な外交戦略に発展した。

¹¹ ヨークのマーガレットは、エドワード4世やグロスター公リチャード (Duke of Gloucester) (1452年生-1485年没)とは兄弟弟であった。ウォーベック問題が生じた1491年頃には、弟のリチャード3世もボスワースの戦いに敗れ、戦死していたので、マーガレットを支える影響力のある兄弟は残っていなかった。その戦いで弟リチャード3世を亡き者にし、ヨーク王朝を絶えさせたヘンリー7世にヨークのマーガレットは憎しみを懐いていても好意を持っていなかったであろう。彼女は、彼女の義理の娘メアリー (彼女はブルボンのイサベラが生んだ娘)と神聖ローマ皇帝フレデリック3世 (Frederick III) (1415年生-1493年没) (在位1440年-1493年)の息子マクシミリアンとの結婚の取りまとめに成功した (1477年)。ヨークのマーガレットは、兄弟を失ったが、神聖ローマ皇帝の支持を得ることのできる立場にあったので、ヘンリー7世は、ウォーベックをヨーク公リチャード・オブ・シュールズバリー (Richard of Shrewsbury) の僭称者であると確信し、マーガレットをその仕掛け人として嫌疑を懸けようとしても、神聖ローマ皇帝の影に妨げられ、ヨークのマーガレットに喧嘩を吹かけることができなかったと推測される。

¹² 彼は、ハプスブルグ家の神聖ローマ皇帝フレデリック3世 (Frederick III) (1415年生-1493年没) (在位1440年-1493年)とポルトガルのエルナー (Elnear, daughter of King Edward of Portugal) (1434年生-1467年没)の子息であった。彼は、1477年にブルゴニー公国のメアリーと結婚した。これによってマクシミリアンは彼の妻メアリーを通してブルゴニーやネーデルランドなどを相続することができた。1482年にメアリーが狩猟中に落馬し、そのために死亡した。マクシミリアンは、ブルゴニーやネーデルランドなどを相続した。1493年に、彼は、フランスとの間でブルゴニーとピカルディー (Picardy) と French-Comté と Artois を交換した。ネーデルランドの大半がハプスブルグ家の所有として残った。これはサンリス協定 (the Treaty of Senlis) である。その年、彼は、彼の父の死によって神聖ローマ皇帝に就いた。

フランス王国はネーデルランドからイタリアにその侵攻方向を変えた。1499年と1500年に、フランスのルイ12世 (Louis XII) (在位1498年-1515年)はミラノ公国 (Duchy of Milan)を征服した。このことは、マクシミリアン1世とルイ12世の間の衝突になった。このときすでにマクシミリアンはミラノ公の娘 (Bianca Maria Sforza)と結婚していた (1494年)。マクシミリアンは、神聖同盟を形成し、フランスのイタリア侵攻に対応し、長期間イタリア戦争に関わることとなった。さらに、彼の子息 Philip the Handsome がカスティールのジョアンナ (Joanna of Castile) (1478年生-1555年没)と結婚した。これによってマクシミリアンはスペインにもハプスブルグ王朝を築いた。

¹³ その報復としてヘンリー7世は、1494年にイングランドとネーザランド (ネーデルランド)の羊毛貿易を停止した。フローレンスの商人はイングランドから追い出され、またフローレンスの羊毛貿易を独占していた The Merchant Adventurers 会社は、アントワープからカレーに移動した。両方の会社は、交易の減少によって不利益を被った。1496年にネーザランドとイングランドの貿易戦争を終結させる Magnus intercursus がイングランドとヴェニス、フローレンス、ネーザランド、およびハンザ同盟と締結された。

が、ウォータフォード (Waterford) に包囲され、抵抗にあったので、次に、彼はスコットランド王国に敗走した。

ジェイムズ 4 世は、その僭称者ウォーベックをヨーク公と信じてか、あるいは、イングランドとの外交戦略として利用することを考えていたのか、いずれにしてもジェイムズ 4 世は彼をスターリング城に温かく迎え入れ、彼の遠縁に当たるハントリー伯の娘キャサリン・ゴードン (Lady Catherine Gordon) (1474 年生-1537 年没) と結婚させたのであった。彼女は、2 代ハントレー伯ジョージ・ゴードン 2 世 (George Gordon, 2nd Earl of Huntly) (1455 年生?-1501 年没) の娘であった。1499 年 11 月にウォーベックがロンドン塔から逃亡しようとし取り押さえられ、ロンドンの Tyburn に編み垣で運ばれ、吊るし首にされた。キャサリン・ゴードンは、ヘンリー 7 世によって牢獄に入れられ、その後にはヘンリーの配偶者エリザベスの女官として仕えた。ヘンリー 7 世の娘マーガレット (Margaret Tudor) (1489 年生-1541 年没) がジェイムズ 4 世と結婚した後は、ヘンリーから厚遇された。ヘンリー 7 世は、彼女に贅沢な着物、Purple velvet gown, black hood in the French style などを与えている。

ウォーベックをスコットランド王国が置くことは、イングランド王国とスコットランド王国の戦争、さらにイングランド王国とフランス王国との戦争に拡大する可能性を秘めていた。15 世紀から 16 世紀にかけてヨーロッパ政界ではスペインが指導権を握っていた。そのアラゴン王のフェルディナント 2 世 (Ferdinand II) (在位 1479 年-1516 年) とカスティールのイサベラ女王 (Isabella I) (在位 1474 年-1504 年) (1451 年生-1504 年没) は、イングランドとの交渉に臨んでいたため、ウォーベック問題がイングランド王国とスコットランド王国の間の戦争に発展しないよう外交戦略を採っていた。すなわち、アラゴン・オブ・キャサリン (Catherine of Argon) (1485 年生-1536 年没) とウェールズ王子アーサー (Arthur Henry) (1486 年生-1502 年没) (在位 1489 年-1502 年) との結婚話がイングランドとスコットランド間の戦争によって破綻する可能性があったので、フェルディナントとイサベラは、ジェイムズ 4 世もアラゴンのキャサリンと結婚があり得ることを仄めかし、ジェイムズ 4 世とのパイプも温存する外交戦略を採っていたと考えられる。

スコットランド王国にもスペイン王国の外交官が来ていた。ジェイムズ 4 世は、1496 年にスペイン大使を彼の宮廷に常駐するようにした。彼は、エディンバラにスペイン大使館を借り、その費用を負担した。このときのスペイン大使は Pedro de Ayala (1513 年没) であった。その一方では、ジェイムズ 4 世はウォーベックをイングランド王国に渡すことを拒んでいた。これは、イングランド王ヘンリー 7 世 (Henry VII) (在位 1485 年-1509 年) の神経を逆撫でする行為であった。ジェイムズ 4 世の軍は、1496 年 9 月にイングランド侵攻を準備し、ヨーク公のように、赤色、金色、銀色のバーナーと金メッキした甲冑そして王の大砲などが準備された。9 月 14 日にジェイムズ 4 世とウォーベックは、ホーリールード修道院でお祈り

をし、次の日、聖 Triduana 礼拝堂でお祈りをした。1496年9月21日にジェイムズ4世は、ウォーベックと共に、コールドストリーム (Coldstream) でトウィード川 (River Tweed) を渡り、イングランド北部のノーザンバーランドを侵攻し、ヒートン城 (Castle Heaton) を破壊しようとしたが、資金が尽き、軍は退却し、ウォーベックの希望を実現することはできなかった。イングランド王国との交渉の結果、ジェイムズ4世は態度を和らげ、1497年7月頃にウォーベックはスコットランドを去った。このときのスコットランドの交渉役は、ジェイムズに全権を委された Pedro de Ayala であった。彼は、イングランド国王の代理でノーマン城守であったリチャード・フォックス (Richard Foxe)¹⁴ (1448年生?-1528年没) とメルローズ修道院で交渉した。1497年7月に、ジェイムズは、ウォーベックを Waterford に戻すために、彼に Cuckoo という名の船を与え、ブリタニア人の船長のもとに雇い入れた全乗務員を与えた。1497年9月7日にウォーベックは Land's end の Whitesand に上陸した。彼は、Cornish の人々のスコットランドとの政争に課された重税に対する怒りを利用しようとした。彼は、Richard 4世を宣言し、Cornish 軍をエクセターまで進めた。これに対しヘンリー7世は、Cornish を討つために、彼の中心的な将軍 (Giles, Lord Daubeney) を送った。ウォーベックは王の偵察隊が近くにいると聞くと、パニックになり軍を捨て、逃亡した。彼は、ハンプシャー州にある Beaulieu 修道院で捉えられ、Taunton で牢獄に入れられ、次に、ロンドン塔に入れられ、市民の野次と嘲笑の中を馬の背に乗り、通りをパレードした。1499年11月23日にロンドン塔からロンドンの Tyburn に編み垣で引かれていき、そして吊された。これで外交問題としてのウォーベック問題は決着した。

しかし、それでもジェイムズ4世はイングランド侵攻を止めなかった。1497年8月にジェイムズは、スコットランド国境地方に大砲を配置し、フォックス司教のノーラム城を包囲した。軍資金が尽きたので、数日後には包囲を解き、エディンバラに戻った。サリー伯が率いるイングランド軍は、国境に来て、ベリクの近くのエイトン城 (Ayton) を奪った。このとき、ジェイムズ4世は、ダンバー城でベリクの統治者との会合のために停戦すると、サリー伯は

¹⁴ 彼は、リンカンシャーのヨーマン層の自出であった。彼の35歳までの生涯については殆ど知られていない。多分、オックスフォードのマグダリン (Magdalen) カレッジからケンブリッジ大学に進み、そこで彼は研究したと思われる。1484年には彼は研究のためにフランスにいたが、そこでヘンリー・テューダと接触した。このとき、ヘンリーは王位を求めていた。その後、彼がヘンリー7世の政務大臣になったのは、フランスでの出会いによるとと思われる。彼は、カンタベリー大司教のジョン・モートン (John Morton) の下で働き、彼の死後、フォックスはヘンリー7世の第1の信頼者になり、戦略的業務を遂行した。

1487年にエクセターの司教に選出され、1492年にはパース・ウェルスの管区に、1494年にはダーラムの司教管区に移された。彼は、スコットランドとの関係に携わる領主として、ウォーベックの利益のためにスコットランドの侵攻からノーラム城を管理し護った。このウォーベック問題が解決すると、彼はウィンチェスター管区に移され、アーサー王子とキャサリン・オブ・アラゴンの結婚交渉を解決させた。

軍隊を退却させた。その後、9月にイングランド王国とスコットランド王国の7年間の停戦協定がエイトンで取り交わされた。これがエイトン協定 (Treaty of Ayton) である。この協定の交渉でスコットランド側からジェイムズ4世の代表として Pedro de Ayala が出席した。ジェイムズ4世は彼に交渉内容に関する権限を与えた。この協定では、フェルディナント2世とイサベラ女王が仲裁者とされていた。この協定では国境監視者に大きな権限が与えられた。例えば、国境を侵犯した犯罪者の刑を20日後に執行することや現行犯での犯罪者に対する重罪の執行などに関して権限が与えられた。また、亡命で国境侵犯する犯罪者は20日以内に帰されるか、あるいは、追放される。この協定を維持するために国境を監視する多くの管理委員が任命された。ジェイムズ4世は1498年2月にこの協定に聖アンドリュースで調印した。

ジェイムズ4世のウォーベック問題への対応に苛立ったヘンリー7世は、その長女マーガレット (Margaret Tudor) (1489年生-1541年没) を彼の王妃にするという強引な申し出をしてきた。ジェイムズ4世は1501年にその申し出を受け入れた。これは、1502年に結ばれたスコットランドとイングランドの間で永久平和条約 (Treaty of Perpetual Peace) の一部であった。この協定の交渉はロンドンで行われた。アンドリュー・フォーマン (Andrew Forman) (1465年生?-1521年没) とウィリアム・ダンバー (William Dunbar) (1460年生?-1520年没?) がスコットランドの使節であった。これは、エイトン協定ですでにイングランドとスコットランドの間で確立していた平和を推し進めるものであった。両国の国境地域を管理するルールや手順が示され、かつ、両国の国境紛争が戦争に進むことを阻止する協定であった。ジェイムズ4世は1502年12月にグラスゴー大聖堂の中央祭壇で宣誓した。この協定はローマ教皇を保証人として成立した¹⁵。もし一方が海陸いずれかにおいて先に侵略した場合には、教皇が侵略者を破門するという条件を付し、マーガレット・テューダのスコットランドへの興入れを決定した。ヘンリー7世は、表面的には、イングランド王国とスコットランド王国の友好や平和を唱えていたが、実際には、スコットランドとフランスの同盟関係を引き裂き、フランスを孤立させることを狙っていた。このころ、既にフランス国王シャルル8世 (Charles VIII) (在位1483年-1498年) が1494年にナポリを占領していた。これに対し、1511年にローマ教皇、ドイツ皇帝、スペイン王、およびヴェネチアは、神聖同盟 (Holy League) を結成しフランスに対抗した。その後、この同盟に神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世とイングランド王ヘンリー7世が加わった。

ヨーロッパ中でフランスは孤立し、フランスを支持するのは、スコットランドのみとなっ

¹⁵ 1503年4月にヘンリー7世は、ローマ教皇との批准のためにローマにヘレフォードかつウスターの司教 Adrian Castellesi を遣わした。

た。ジェイムズ4世がマーガレット・テューダと結婚したころ、フランス国王はルイ12世(Lois XII) (在位1498年-1515年)の治世下であり、イングランド国王は、ヘンリー7世からヘンリー8世(Henry VIII) (在位1509年-1547年)に替わる頃であった。ヘンリー8世(1491年生-1547年没)は、ヘンリー7世の播いた新しい王政の種を育てた国王であったが、儉約家で金銭に細かいヘンリー7世とは全く違った性格¹⁶で、貪欲なギャンブラーであり、賭博者であり、馬上槍試合や狩猟やテニスなどのスポーツに卓越し、かつ、ラテン語、フランス語、そしてスペイン語に通じ、熟達した音楽家、著作家、詩人であり、人文主義者であった。1521年にはマルティン・ルター(Martin Luther) (1483年生-1546年没)を批判する彼の著作「Assertio Septem Sacramentorum」は、教皇レオ10世から信仰の擁護者の賛辞を受けた。人文主義者エラスムス(Desiderius Erasmus) (1466年生-1536年没)は、ヘンリー8世を高く評価した。

マーガレット・テューダがヘンリー8世の姉であったので、ジェイムズ4世は、ヘンリー8世の義兄であった。1503年に結婚したとき、マーガレットは14歳であった。2人の間に、3男2女が生まれるが、3男以外は全て1歳未満で死亡していた。マーガレット・テューダは、ジェイムズ4世が死んだ後、1514年に6代アンガス伯アーチボルド・ダグラス(Archibald Douglas, 6th Earl of Angus) (1490年生-1557年没)と再婚し、1541年にパースのメスバーン城(Methburn Castle)で生涯を閉じた。イングランド王エリザベス女王が死んだ後に、イングランド国王に迎え入れられたスコットランド王ジェイムズ6世は、母系(メアリー女王)からも父系(ダーンリー卿は、マーガレットとアンガス伯の孫であった)からもマーガレット・テューダ(Margaret Tudor) (1489年生-1541年没)の曾孫に当たった。ジェイムズ6世は、母系からも父系からもテューダ家の血を継ぐもの(マーガレットの曾尊)であった。この故に、彼は、1603年にイングランド国王に迎えられた。

1.3 フロドゥンの戦い

ジェイムズ4世は、ヘンリー7世の死後、またスペインの大使でエイドン協定の際にジェイムズ4世のイングランド侵攻を思い止まらせたPedro de Alayaが死んだ半年後に、イングランド王国を侵攻した。ジェイムズ4世の死は、外交に長けていなかった彼自身の判断の誤りによるものであったと考えられる。フランス王ルイ12世の要請によって、イングランドの注意をフランスから避けるために、ジェイムズ4世はイングリッシュ侵攻に出たと思われる。

¹⁶ 彼の性格は、1520年のフランソワ1世との会合に現れている。この会合は、The Field of the Cloth of Gold (金欄の地)と命名されている。両王の目も眩むような天幕と出で立ちが、金の衣服、金の糸と絹で織られた高価な織物のようであったので、その会合が、The Field of the Cloth of Goldと名付けられた。

ヘンリー 8 世は、北フランスに領土の保有を強く望んでいたのも、ジェームズ 4 世のフランス出兵制止の要請を無視し、1513 年にフランスに渡り侵攻した¹⁷。ジェームズ 4 世は、ノーザンバーランドを侵攻した。これに対し、ヘンリー 8 世がフランス遠征に出ているので、女王キャサリン（キャサリン・オブ・アラゴン）を大將にしてイングランドは対抗した。サリー伯トマス・ハワード（Thomas Howard, Earl of Surrey, 2nd Duke of Norfolk）¹⁸（1443 年生-1524 年没）旗下の 26,000 人のイングランド軍がスコットランドに北進してきた。これに対しジェームズ 4 世が全土に応援軍の召集を呼びかけると、多くのハイランド氏族首長も手勢を連れて駆けつけ、4 万人のスコットランド軍が集まった。ジェームズ 4 世は、コールドスゥルム（Coldstream）でトゥイード川（River Tweed）を渡り、ノーラム（Norham）、フォード（Ford）などの 4 つの城を落とした。1513 年 9 月にノーラムの南のフロドゥンにおいて、両軍は決戦した（フロドゥンの戦い）。その結果は、ジェームズ軍の完全な敗北であった。両国とも歩兵を使う中世の戦闘方式を採る点では大差がなかった。その敗因は、よく組織され野戦向きの武装をしたイングランド王国の軍隊に圧倒されたこと、山岳地形のノーザンバーランドでの足下の滑りやすい土地での戦闘であること条件に入れるなら、スコットランド軍の長槍やジェームズ 4 世の大砲は野戦向きではなかったが、他方、イングランド軍の長柄の矛や固定式の大砲は野戦向きであった。この戦いでスコットランド軍の死者は 1 万人以上、その中には、伯卿、氏族の首長、聖職者もいた。40 歳のジェームズ 4 世はこの戦いで敗死した。彼の遺体は行方不明になったままである。

この侵攻は、第 1 に、外交大使 Pedro de Ayala の死によって外交に長けていなかったジェ

¹⁷ イングランドがフランスを侵攻する大義名分は、1511 年にローマ教皇ユリアス 2 世（Pope Julius II）からの援助誓願であった。この教皇は神聖同盟の提唱者であった。（在位 1503 年-1513 年）ヘンリー 8 世の軍は、1513 年のスプールの戦い（The Battle of the Spurs）でフランスを大敗させた。

フランスとの講和条約は、1514 年に締結され、メアリー・テューダ（Mary Tudor）（1496 年生-1533 年没）がフランス王ルイ 12 世と結婚した。しかし、3 ヶ月後にはルイ 12 世は死亡した。その後、メアリーは、チャールズ・ブランドン（Charles Brandon, 1st Duke of Suffolk）（1484 年生？-1545 年没）と再婚した。これは、フランス王フランソワ 1 世（Francois I）（在位 1515 年-1547 年）がイングランドとの同盟をいやがったための結果であった。

¹⁸ 彼は、イングランド王国の 3 代の国王に仕えた。彼は、エドワード 4 世（Edward IV）（在位 1461 年-1470 年、1471 年-1483 年）、ヘンリー 7 世（在位 1485 年-1509 年）、ヘンリー 8 世（在位 1509 年-1547 年）の 3 代のイングランド国王に仕え、彼の父と共にリチャード 3 世（Richard III）（在位 1483 年-1485 年）の王位簞奪を支持した。リチャード 3 世によって、彼は 1583 年にサリー伯を与えられた。2 代リッチモンド伯ヘンリー・テューダ（後のヘンリー 7 世）は、1485 年 8 月にボスワースの戦い（The Battle of Bosworth）でリチャード 3 世を打ち破り、王位を簞奪した。彼はヘンリー 7 世に土地を奪われ、3 年間の間ロンドン塔に閉じこめられたが、1499 年に枢密院のメンバーに加えられ、その年には財務長官になった。ヘンリー 7 世の 3 人の執政官の一人になった。1509 年にヘンリー 7 世が死ぬと、彼はヘンリー 8 世には軍の元帥として仕え、1513 年のジェームズ 4 世とのフロドゥンの戦いでは、イングランド王国に勝利をもたらした。この戦勝によって 1514 年にノーフォーク公を与えられた。

イムズ4世の判断を誤らせたことによる。第2に、フランスとの古い同盟によって強制された面もあったが、ジェームズ4世自身のイングランド王ヘンリー8世に対する判断でもあったであろう。ジェームズ4世のヘンリー8世のスコットランドを属国と見なす(扱おうとする)姿勢・態度に対する怒りであった。ヘンリー8世には、このとき世継ぎの男子が産まれていなかったが、ジェームズ4世にはマーガレット・テューダとの間に男児が生まれており、ヘンリー8世は、スコットランド王国とイングランド王国の大君主として自身を位置づけていた。これに、ジェームズ4世は我慢ができなかったであろう。これに対する反発として、彼はフランスの古い同盟を支持した。ジェームズ4世は外交上の駆け引きをした。第3に、ジェームズ4世は、当時の国際情勢からイングランドに勝利できると判断し、イングランド侵攻を決定したと考えることもできる。何れにしても、1497年8月のノーザンバーランド侵攻後に、イングランド王国との間のエイドン協定で両国の平和維持が示され、さらに、1502年の両国の永久平和協定で国境侵犯が戦争に拡大しないことを誓ったにもかかわらず、ジェームズ4世はその協定に反してイングランド侵攻を決行した。このためにその協定の条項に基づき、ジェームズ4世はローマ教皇から破門された。

ジェームズ4世が、1513年のフロドゥンの戦いで戦死したとき、彼の後継者は、生後1年半の3男ジェームズであった。彼がジェームズ5世 (James V) (在位1513年-1542年)として即位した。スコットランドの伝統となった摂政による統治が再開された。これは貴族の派閥政治の温床であった。スコットランド部族間の抗争の繰り返しとその抗争にイングランドやフランスの両強国の介入がスコットランド王国の近代の黎明期であった。この時期にジェームズ5世が嬰兒国王としてスコットランドの舵取りを担う運命を背負った。

1.4 ジェームズ4世の死とジェームズ5世の摂政：派閥闘争

ジェームズ4世の戦死は、スコットランド王国にとって国王を突然に失い、にわかに国家的危機に陥ったことを意味していた。その政治的空白をいかに回避するかがスコットランド王国にとって国内政治のみならず国際政治においても最重要な国策問題であった。ジェームズ4世の子息が1歳半でジェームズ5世として国王に就いた。その摂政役は王母のマーガレット・テューダであった。摂政政治は、派閥闘争を生み出し国政の不安の種であり、また有力貴族間の争いの温床でもあった。最初の摂政役王母マーガレット・テューダ (Magaret Tudor) は国政に全く不向き人物であったので、ジェームズ2世の孫で親英派であった初代アラン伯ジェームズ・ハミルトン James Hamilton, 1st Earl of Arran, 2nd Lord Hamilton) (1475年生?-1529年没) や親仏派の3代ヒューム卿アレグザンダー・ヒューム (Alexander Home, 3rd Lord Home) (1516年没) やジェームズ・ビートン¹⁹ (James Beaton, Archbishop of Saint Andrews) (1472年生-1539年没) が彼女の補佐役についた。初代アラン伯ジェームズ・ハミ

ルトンは、初代ハミルトン卿(James Hamilton, 1st Lord of Hamilton) (1415年生?-1479年没)とスコットランド王ジェームズ2世の娘メアリー・ステュワート(Mary Stewart) (1453年生-1488年没) (スコットランド王ジェームズ3世の妹)との間の一人息子であった。彼は、ジェームズ4世と従兄弟であり、1490年4月にアレクサンダー・ヒューム(Alexander Home, 3rd Lord Home) (1516年没)の娘と結婚した。ジェームズ4世は、彼を1489年にラナークの州長官にし、1503年8月にスコットランド枢密院顧問にした。彼は、ジェームズ4世とマーガレット・テューダとの結婚の交渉をし、1503年8月3日に2人の結婚式に出席した。その同じ日に彼はアラン伯に叙任された。ジェームズ4世は、1507年に初代アラン伯ハミルトンをフランス王ルイ12世の王宮に外交大使として送ったが、彼は、スコットランド王国とフランス王国の古い同盟を解消させようとしていたヘンリー7世に捕らえられた。

初代アラン伯は、この時点では親英派であったが、黒いダグラスの血筋に当たることもあり、赤いダグラスの親英派の6代アンガス伯アーチボルド・ダグラスとは敵対関係にあったと思われる。

摂政政治の不安定さは、摂政役の王母マーガレットが、1514年8月に親英派の6代アンガス伯アーチボルド・ダグラスと再婚²⁰したことによって顕在化した。数少ない有力貴族の中で親英派の6代アンガス伯と王の未亡人の再婚に、摂政役を補佐していた重臣が嫉妬し反発し、彼女からその摂政役を召し上げた。親仏派は、その代わりにフランスから呼び寄せた2代オルバーニ公ジョン・ステュワート(John Stewart, 2nd Duke of Albany) (1481/1484年生-1536年没)を摂政にし、その不安定さを凌ごうとした。彼は、初代オルバーニ公アレグザンダー・ステュワート(Alexander Stewart, 1st Duke of Albany) (1454年生-1485年没)とアンヌ・ドゥ・ラ・トゥール(Arne de la Tour d'Auvergne) (1512年没)の間に生まれた。初代オルバーニ公アレグザンダーは、ジェームズ2世の次男として生まれ、ジェームズ3世の弟であった。彼には、スコットランド王位の継承権があった。2代オルバーニ公は、

¹⁹ 彼は、デイヴィッド・ビートン(David Beaton, Archbishop of Saint Andrews) (1494年生-1546年没)のおじであった。彼は、1505年に大蔵大臣(Lord High Treasurer of Scotland)、1508年にギャロウェイの司教に選任され、1515年に大法官になった。1522年に聖アンドリュースの大司教になった。彼は、司教として、ヘンリー8世のスコットランド王国を支配下に入れようとする隠謀を阻止するために、その全勢力を投入した。彼は、パトリック・ハミルトン(Patrick Hamilton) (1504年生-1528年没)と異端者を聖アンドリュースにおいて焚刑に処した。

彼は、ジェームズ5世の絶大な信望を獲得していたが、オルバーニ公ジョン・ステュワートの嫉妬のために国璽尚書の任を解かれた。

²⁰ ジェームズ4世の死後一年も経たない内に、1514年に6代アンガス伯アーチボルド・ダグラスと再婚し、1515年にハーボットゥル城で娘マーガレットを出産した。このマーガレットと4代レノックス伯マッシュュー・ステュワートとの間に生まれたのがダーンリー卿ヘンリーであった。このダーンリー卿ヘンリーとスコットランドのメアリー女王の間に生まれるのがスコットランド王ジェームズ6世である。

親仏派の代表であったために、王母マーガレットにスコットランド国内からの退去を命じた。彼女は、イングランドのノーザンバーランドのハーボトゥル城(Harbottle Castle)に移った。王母マーガレット追放の彼の決断は、深い政治判断によるものではなく、単に彼がスコットランドとイングランドの関係を深く理解していないことやフランス語しか話さないことによっていた。彼は、この采配によって摂政としての人気を博し、議会によって王国第2の人物に宣言され、王位継承第1位者に公認されていた。しかし、彼は、王母マーガレットの補佐役であった3代ヒューム卿アレクザンダー・ヒュームなどの不穏分子を処刑し(1516年)、1517年にフランスに一時帰国し、それから4年間もスコットランドを留守にしたのであった。この1517から1521年の4年間、摂政会議の議長を担ったのが初代アラン伯ジェイムズ・ハミルトンであった。また、彼がフランスに出発すると、王母であり6代アンガス伯と結婚したマーガレット・テューダもスコットランド王国に戻ってきた。

摂政の2代オルバーニ公のフランスへの退去は彼のスコットランド現状に対する認識の浅さを意味する。2代オルバーニ公がスコットランドを留守にしていた間に、6代アンガス伯ダグラス(赤いダグラス)の一族と初代アラン伯ハミルトンの一族によるエディンバラのローヤル・マイルでの市街戦が1520年4月30日に起こった。この争いは、「コウズウェイの一扫(Cleanse the Causeway)」と呼ばれ、親英派ダグラス一族が親仏派のハミルトン一族に対する圧勝で終結した。この派閥闘争でのハミルトン一族の指導者は、ハミルトン卿の庶子(アラン伯と異母兄弟)であったサー・パトリック・ハミルトン(Sir Patrick Hamilton)(1520年没)と、ハミルトン伯の庶子であったサー・ジェイムズ・ハミルトン(Sir James Hamilton)(1495年生-1540年没)であった。アンガス伯が親英派であったために、アンガス伯の勝利は、スコットランド王国をさらに親英的方向に動かしたと思われる。

他方、2代オルバーニ公は、スコットランドの摂政としてフランス王フランソワ1世(François I)²¹(在位1515年-1547年)との間で、1517年に「古い同盟」を再確認するルーアン条約(Treaty of Rouen)を結んだ。フランソワ1世は、依然として列強から孤立して、その2年前にミラノ²²(Milano)を押さえ、ハプスブルグ家(The House of Habsburg)と神聖ローマ皇帝の

²¹ フランソワ1世は、幼少のころ人文学者の教育を受け、即位後、レオナルド・ダ・ヴィンチ(Leonardo da Vinci)(1452年生-1519年没)やロッソ・フィオレンティーノ(Rosso Fiorentino)(1495年生-1540年没)らを保護した。またコレージュ・ド・フランスを設立し、ヘブライ語、古代ギリシャ語、数学の研究を促進させた。ルイ12世に世継ぎがいなかったため、その大甥のフランソワが王位を後継し、フランソワ1世として王位に就いた。フランソワが王太子のころルイ12世と王妃アンヌとの間に生まれた又従姉妹のクロードと結婚して、ブルターニュ公となり、1532年にブルターニュ公国をフランスに併合した。

²² 1500年にフランス王ルイ12世(Lois XII)(在位1498年-1515年)は、スフォルツァ家(The House of Sforza)のイル・モーロを幽閉し、ミラノ公国を征服した。だが、フランスのイタリア介入を嫌うローマ教皇は神聖同盟を形成し、1513年にフランスはミラノから追放され、スフォルツァ家が復歸した。1515年

帝位を争う²³ 気概を抱いていたので、スコットランド王国との同盟を再確認する必要があった。彼は、この協定によって、ハプスブルグ家と手を握っていたヘンリー 8 世の牽制を狙っていたのかも知れない。2代オルバーニ公の狙いはスコットランド王国のためではなく、むしろ彼自身を強国のフランス王国に取り入れることであった。

スコットランドにおいて6代アンガス伯がヘンリー 8 世と陰謀を企む状況になったので、1521年に2代オルバーニ公は急いでスコットランドに戻った。6代アンガス伯の陰謀は成功し、彼は、王母マーガレットの留守の間に6代アンガス伯が彼女の財産の一部を押さえ、さらに、そこに妾とその子女と共に住んでいた。マーガレット・テューダは2代オルバーニ公と手を組み6代アンガス伯を権力の座から降ろした。6代アンガス伯は、1521年11月に反逆罪で捕らえられ、1522年3月に罪人としてフランスに送られた。フランスとの間で確認されたルーアン協定(古い同盟)を具体化するために、1522年と1523年の2回に亘って、フランス部隊の応援を得たスコットランド軍は、イングランドを侵攻した。しかし、スコットランド軍が、国境にさしかかると、その進軍は止められた。というのは、その戦いがスコットランドのためではなく、フランスのためであると連隊が感じたからであった。事実、2代オルバーニ公は、1524年にフランス軍を帰し、彼自身もフランスに行ったまま、再びスコットランド王国には戻らなかった。

6代アンガス伯は1524年にフランスからイングランドに逃亡した。彼は、ヘンリー 8 世を支えるという約束を携えて、1524年11月にスコットランドに戻ってきた。しかし、マーガレット・テューダは、弟ヘンリー 8 世と組む6代アンガス伯と対立し、ハーボトゥル城を出て、オルバーニ公の側に付いた。2代オルバーニ公はスコットランド王国を去ったが、しかし、スコットランド王国の摂政政治の不安定さは、なおも続いた。その後、親英派であった初代アラン伯ジェームズ・ハミルトン (James Hamilton, 1st Earl of Arran) が、1524年11月に王母マーガレットを取り込み、ジェームズ 5 世をスターリング城からエディンバラ城に移し、政治的な主導権をとった。この部隊には、初代アラン伯の他に、3代レノックス伯ジョ

にフランソワ 1 世 (François I) (在位 1515 年-1547 年) はミラノ (Milano) に侵攻し、スフォルツァ家を追放し、ミラノを支配した。

²³ フランソワ 1 世は、皇帝マクシミリアン 1 世の死後、1519年にスペイン王カルロス 1 世 (Carlos I) (在位 1516 年-1556 年) と神聖ローマ帝国の帝位を争い、惨敗する。カルロス 1 世は神聖ローマ帝国の皇帝カール 5 世 (Karl V) (在位 1519 年-1556 年) として帝位に就いた。これによって、フランスはハプスブルク家スペインとハプスブルク家ドイツに挿まれた。フランソワ 1 世とカール 5 世の覇権争いは延々と続いた。フランソワ 1 世はハプスブルク家の包囲網を避けるための活路をイタリア侵攻に見いだしていた。フランソワ 1 世は、1521年から1544年にかけて、イタリアを巡って皇帝カール 5 世と争った。これは、第 1 次イタリア戦争(1521年-1526年)、第 2 次イタリア戦争(1526年-1529年)、第 3 次イタリア戦争(1536年-1539年)、そして第 4 次イタリア戦争 (1542年-1544年) として知られている。

ン・ステュワート (John Stewart, 3rd Earl of Lennox) (1490年生?-1526年没) や4代グレンケーン伯ウィリアム・カニングム (William Cunningham, 4th Earl of Glencairn) (1490年生?-1548年没) がいた。1525年2月に、6代アンガス伯アーチボルド・ダグラスは、エディンバラに入り、アラン伯と同調して、ヘンリー8世の了解の下、ジェームズ5世をフォークランド宮殿に軟禁し、ダグラス派による政権を樹立した²⁴。アンガス伯は、議員 (Lord of the Articles) に任命され、摂政会議のメンバーになり、デイヴィッド・ビートンと共に権力の中核にいた。その3月に彼は国境監視員の長官に任命され、国境での無秩序や反乱を抑えた。

王母マーガレットはジェームズ5世をアンガス伯の監禁から解くことを望み、3代レノック伯ジョン・ステュワート (John Stewart, 3rd Earl of Lennox) (1490年生?-1526年没) とビートン大司教にその救出の説得を度々試みていた。その中の一つが1526年8月のリンリスゴ・ブリッジの戦い (The Battle of Linlithgow Bridge) であった。これも派閥闘争の一つであった。ジェームズ5世をスターリング城からエディンバラ城に連れ去られた王母派は再びスターリング城に王を連れ戻すための戦いをアンガス伯やアラン伯に仕掛けた。3代レノック伯は1万以上の部隊を集め、スターリング城からエディンバラ城に向けて行進した。これに対し初代アラン伯はリンリスゴと周囲の地域から2,500の人々を集め、リンリスゴを望むペイス丘 (Pace Hill) とアヴォン川 (River Avon) に陣取り、その行進を遅らせようとした。3代レノックス伯は、側面から初代アラン伯を攻撃し、強力な部隊を引き連れたアンガス伯が到着する前にアラン伯を打ち倒す戦略を練った。初代アラン伯の大半を撃退したが、その時ジェームズ5世を伴った6代アンガス伯が現れ、3代レノックス伯は時間切れであった。この戦いは初代アラン伯の勝利に終わった。3代レノックス伯は負傷したが、この戦いでは命を落とすことはなかった。

3代レノックス伯について簡単に説明しておこう。レノックス伯は4代 High Stewart of Scotland の末裔で、3代レノックス伯は1511年1月にエリザベス・ステュワート (初代アサル伯ジョン・ステュワートの娘) と結婚した。その子に、4代レノックス伯マッシュュー・ステュワート (Matthew Stewart, 4th Earl of Lennox) (1516年生-1571年没)、6代レノック伯ロバート・ステュワート (Robert Stewart, 6th Earl of Lennox) (1515年生?-1586年没) などがいた。彼は、リンリスゴウ・ブリッジの戦いで負傷し生き残ったが、Finnart のジェームズ・ハミルトン (James Hamilton of Finnart) (1495年生?-1540年没) に暗殺さ

²⁴ このために6代アンガス伯とマーガレット・テューダの不仲が決定的になり、1528年3月に、マーガレット・テューダは6代アンガス伯と離婚し、初代メスヴァン卿ヘンリー・ステュワート (Henry Stewart, 1st Lord of Methven) (1495年生-1552年没) と再婚した。

れた。3代レノックス伯は息子のマッシュュー・ステュワート (Matthew Stewart) (1516年生-1571年没) に継承された。

むすびにかえて

本稿では、15世紀末から16世紀前半のイングランド王国やフランス王国の対立する渦巻く国際情勢の中で、スコットランド王国のアイデンティティを模索した国王ジェームズ4は、イングランド王国の支配や征服を回避したが、徐々にイングランド王国との一体化政策に飲み込まれていったことを概観した。宗教改革前夜のスコットランド王国の歴史的出来事からその一端を検証した。イングランド王国によるスコットランド王国の征服・併合策謀は、チューダ朝においては、ヘンリー7世の治世下での経済力伸展に基づいて、ヘンリー8世のフランス侵攻戦略と呼応させたイングランド王国による一体化攻勢として現れた。1603年のジェームズ6世(在位1567年-1625年)による同君連合や、1707年のイングランドとスコットランドの議会連合によるイングランド王国とスコットランド王国の併合・一体化に到る萌芽が、すでにヘンリー8世の永久平和条約とジェームズ4世とマーガレット・チューダの結婚(1503年)に始まっていたことを示唆した。

参考文献

- マックス・ウェーバー 著(大塚 久雄訳)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫 1989年1月
デシデリウス・エラスムス著(箕輪 三郎訳)『平和の訴え』岩波文庫 1991年11月
イマヌエル・カント著(宇都宮 芳明訳)『永遠平和のために』岩波文庫 1985年3月
スマウト, T. C. (木村 正俊監訳)『スコットランド国民の歴史』原書房 2010年11月
A. L.モートン(鈴木亮・荒川 邦彦・浜林 政夫訳)『イングランド人民の歴史』未来社 1976年
森 護 著『スコットランド王国史話』大修館書店 1996年12月
森 護 著『英国王室史話』大修館書店 1988年7月
David Ross, *Scotland: History of A Nation*, Lomond Books 1998年
(くぼた よしひろ マクロ経済学と金融論専攻)